

氏 名 今井 彬暁

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2170 号

学位授与の日付 2020 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成—「常世」と「現世」の関係に着目して—

論文審査委員 主 査 教授 檜永 真佐夫

教授 韓 敏

教授 信田 敏宏

教授 中田 友子

神戸市外国語大学 国際関係学科

名誉教授 横山 廣子

総合研究大学院大学／国立民族学博物館

(様式3)

博士論文の要旨

氏 名 今井 彬暁

論文題目 ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成—「常世」と「現世」の
関係に着目して—

本研究の目的は、ベトナムの山岳少数民族であるモンを研究の対象とし、モンが、彼らを取り巻く可視の物的存在（以下、「物体」）および不可視の霊的存在（以下、「霊体」）との関係の中で、いかにして彼らの身近な諸存在をつくり上げているのかを明らかにした上で、そうした諸存在との関係においてモンの行為や説明に理解を与えることである。モンの世界は、霊や魂といった不可視の霊体が充溢する世界である。モンは、それら霊体を物体と組み合わせることにより、人、家、祖先、作物をはじめとする、彼らに身近な諸存在をつくり上げる。そのようにしてつくられた諸存在は、常世と現世の二元論に基礎づけられており、本研究は、研究の前提をそうしたモン自身の二元論にまで掘り下げることにより、霊体および物体に対するモンの行為や説明により深い理解を与えようとする試みである。

本研究は、以下の2つの手続きを通して、上記の研究目的の達成を企図した。第1の手続きは、調査対象であるモンの全面的な肯定である。まずは、モンの行為やそれについての彼らの説明を、疑うことなくそのままに受け取り、認めることを出発点とする。この方法を実行すると、しばしば、人々の行為や説明に、論理的な矛盾や道義的な問題が浮上する。例えば、霊や魂をめぐる人々の説明が因果関係を無視しているように思われたり、人間の生命に対する人々の行為に道義的な問題があるように見えたりする。そうしたとき、本研究は、第2の手続きとして、彼らを疑う代わりに、研究者自身が拠って立つ前提に疑いの目を向ける。彼らの行為や説明を肯定する過程の中で、研究者自身が普遍的だと考える前提を批判的に検討することにより、研究者自身が拠って立つ前提を相対化するのである。この自己批判に基づく相対化によって、彼らの全面的な肯定の達成を企図する。これら2つの手続きを、文化の表象の水準においてではなく、存在論の水準にまで立ち返りながら進めることにより、人々の行為や説明に理解を与えることが、本研究のねらいである。

このような研究の方法は、研究対象の理解にあたり、「なぜ」に関する問いではなく、「いかにして」に関する問いを提起する。研究対象であるモンの行為と説明をそのままに受け取るならば、多くの場合、「なぜ」に対する答えは、モン自身がすでに持ち合わせているため、問われる必要はなくなるからである。例えば、モンが治癒儀礼を行う理由は自明であり、それは、病気を治すためである。これをそのままに受け取るならば、ここでは、「なぜ」治癒儀礼が行われるのかを問う必要はなくなる。その代わりに、治癒儀礼が、「いかにして」病気を治すのかが問いとして浮上する。こうして、研究の問いは、治癒儀礼の機能や意味の解釈から、治癒儀礼が効果を発揮する際に現れる因果関係へと視点を移す。この因果関係を、研究者の前提に依拠してではなく、モン自身が拠って立つ前提に基づいてたどる。このようにして、モンが拠って立つ前提に基づき、彼らの行為や説明を捉え直すことで、

モンの行為や説明に対して、先行研究とは異なる理解を与えることを、本研究は企図した。

結論として、本研究は第1に、モン自身の二元論に依拠することで、論理的な矛盾をはらむように見える事態が因果関係を伴って現れることを、モンの治癒儀礼の分析を通して例証した。モンの治癒儀礼は、病人の身体にほとんど触れることなく病気を治す。この病気から治癒までの因果関係を辿るためには、まずは個人の制作過程が明らかにされなければならない。モンは、赤子が生まれると、入魂儀礼を行い、赤子の身体に魂を呼び入れる。これにより、身体と魂が結合し、ネイン（以下、「人」）が制作される。魂が呼び入れられる以前の身体は十全な人ではないため、入魂儀礼を行う前に死んだ場合、赤子の身体は動物の死骸と同様にただ遺棄される。対照的に、入魂儀礼の後に死んだ場合には、赤子の魂と身体に対して一連の葬送儀礼が行われる。このように、モンの個人は、魂と身体から構成されており、それらが分離すると死を迎える。モンの病気とは、これら魂と身体が一時的に分離した状態なのである。従って、この病気は、身体から分離した魂を、再び身体へと呼び戻すことで治癒されなければならない。治癒儀礼は、これを達成するための儀礼なのである。ここでの因果関係は、魂（常世）と身体（現世）のあいだで作用するため、モンの治癒儀礼を精神（文化）と身体（自然）の二分法に基づいて理解しようとする、論理的な矛盾に陥ってしまうのである。

本研究の結論として、第2に、常世と現世の二元論が、モンの諸行為に道徳的な基盤を与えることを示した。その一例として、生命に対するモンの態度が挙げられる。モンは、葬送儀礼などで大量の酒を酌み交わす。なぜ酒を飲むのかと聞くと、酩酊すると他の参加者である親族成員との親交を深められるからだと答える。その飲酒の量は非常に多く、過剰な飲酒が原因で命を落とすこともしばしばあるが、モンは、「死人が出ては飲まなければならない」と語る。個人の命を危険に晒してでも親交を深めるために大量の酒を酌み交わす、という外部者にとって皮肉に見えるこの行為は、モンにとっては矛盾ではない。死後も常世で魂として存在し続けるモンにとって、自身が死んだとき、自身を弔う親族が不可欠となる。弔われない魂は、常世の祖先との合流や現世への転生を果たせなくなる。葬送儀礼における魂の弔いは、儀礼の形式を共有する親族集団によって担われるため、親族の紐帯を良好に保つことは、親族が協力して葬送儀礼を遂行するための必須の条件である。モンにとって最も避けるべき事態の1つは、死後に正しく弔われないことであるため、モンは、時として個人の生命を犠牲にしてでも、親族関係を良好に保つことを重視するのである。

以上のようなモンの常世と現世の二元論は、自然と文化の二元論とは異なる。後者においては、霊や魂といった超自然的存在は文化の表象の産物とされ、実在とは見なされない。これに対して、モンの二元論では、自然と文化はともに現世の領域に位置づけられ、さらにその外側に広がる常世の領域で魂や霊が実在している。ここで注意すべきなのは、常世の領域が存在するか否かを現在の科学は証明し得ない以上、常世の存在を前提するか否かは、選択の問題でしかないということである。モンは常世があることを前提して諸存在をつくり上げるため、常世がないと前提する人々とのあいだには、存在論的な差異が生じるのである。モンの行為や説明は、こうした存在論的な差異を踏まえて理解されなければならないのである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 今井 彬暁

論文題目 ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成
—「常世」と「現世」の関係に着目して—

本論文は、中越国境に近いベトナム北部山岳地サパにある少数民族モンの一村落におけるフィールドワークに基づき、アニミズムやシャーマニズムとして特徴づけられてきた伝統的信仰を主な分析対象としてモンの社会と文化の特質に迫っている。世界は可視の物体と不可視の霊体の两部分から構成され、人間を含めた諸存在が常世（イェー・ケー）と現世（ヤー・ケー）との間で関係し合っていると捉えるモン独特の存在論を明らかにし、ときに論理的矛盾や道義的問題さえ感じさせるモンの行為や言動を彼らの論理に沿って解釈する本論文は、「存在論的転回」という人類学における新たな理論的枠組みを取り込んだ意欲的な民族誌的研究である。

本論文は序章（1章）、本論を構成する2～6章、結論（7章）の合計7章からなる。

序章では、モンは自分たちを取り巻く存在が、現世にある物体と常世にある霊体の組み合わせであり、物体ならびに霊体とは相互に関係し合っている、という現世と常世の二元的世界観を明らかにすることで、モンの行為や言動に新たな理解をもたらすという本論文の目的が示される。その上で、研究の背景や方法、モンの世界観を織りなす主要概念、調査地ならびに調査の概要、本論文の構成を説明する。

2章は、人類学における霊や魂に関する先行研究を振り返りながら、「存在論的転回」を基盤とする理論的立場を明らかにする。従来の人類的研究は、進化論的研究以来、批判と変遷を重ねつつも、自然科学が立証する知を暗黙の前提とした上で、多様な文化の表象を分析してきた。これに対し、本論文では現地の人々の言動が示す事物の関係性を通して具現する、モンの存在論を描き出す。

3章は、身体と霊魂が結びついた存在として生起するモンの生者について、子ども、嫁、世帯主、シャーマン、病人に着目して、物体と霊体に作用する儀礼行為を詳述する。それらを通して、モンの治癒儀礼がいかにして病気を治癒させるのか、常世と現世の二元論に立脚するモンの因果関係の論理から解説する。

4章はモンの死者が生者との間に結ぶ関係を、葬送儀礼と祖先祭祀における人々の行為の細部を通して考察し、祖先はいかにして子孫に災厄をもたらすのかという問いに答える。さらに家屋という物体と家霊との複合体である家も、常世と現世の二元的世界の間で、人や祖先と同様の過程をたどって生起する存在であることが示される。

5章では、まず婚姻、出産あるいは養取をめぐる慣行を中心に、モンの父系親族集団が常世と現世のつながりに基づいて構成され維持されることを明らかにする。次に、同姓不婚の規範をもつ同姓集団としての父系親族集団が、祭祀活動を共有するリネージに分節化されていることを、通時的な系譜上のつながりがあるとされ自身のアイデンティティを確

認するために参照する対象としての祖先と、子孫と共時的な互酬的關係で結ばれている祖先祭祀の対象としての祖先との区別の面から指摘する。その上で、個人が誕生、婚姻、出産、死などステージごとに定められた儀礼において親族の一員として役割を果たすことで、祖先と子孫を包括する關係の連鎖の中に生きていることを示す。そのうえで、未婚のまま女性が妊娠することを戒める訓話をめぐって、祖先と子孫の關係の連鎖の点から説明されるモンの論理を議論する。

6章は農業生産活動における互酬的労働交換、祭祀活動における霊体との間の互酬的關係、さらにはフランス植民地期にまで遡ってモン社会の贈与交換原理に基づく経済活動を扱っていて、実は同じ特徴が近年の観光客相手の商業活動にも見られることを指摘する。さらにモンが儀礼時に大量に飲酒する慣習も、飲酒行為が、常世と現世の間あるいは現世内において多面的に結ばれる互酬的な贈与交換の關係の中に組み込まれているから、という視点から解釈する。

結論の7章では、第一に、種々の儀礼に見られるモンの行為や説明は、霊体と物体の複合体として捉えられる存在間で展開する關係が紡ぎだすモンの因果關係の論理に基づいて十全な理解が得られること、第二に、人間の生命に関するモンの道徳的規範が、常世と現世の二元的世界観のなかで、常世の祖先との合流や現世への転生を繰り返す靈魂の循環と、それを支える親族の紐帯の良好な維持に基盤を置いていることが総括される。

宗教儀礼、親族關係、農業、観光業や市場における経済活動などの考察を通じ、モンの世界観をイーミックな視点から明らかにした本論文は、以下の点ですぐれた学術的意義を有する。

1) ベトナムの少数民族の儀礼や宗教に関して、存在論の観点から新たな解釈を加えた点にオリジナリティがあり、同じ手法がベトナムのみならず、大陸部東南アジアの山地少数民族研究に対しての応用が期待できる。

2) シャーマニズムに焦点が当てられがちであった従来のモンの宗教研究に対して、祖先祭祀儀礼について精緻な記述と分析を加え、日常生活に密着した宗教活動の実態を提示している。

3) 新しい親族研究の方向性を示したカーステンの「つながり」(relatedness) 概念を援用し、行為を共にする個人と個人の關係性に注目してモンの親族組織と親族・姻族關係の特徴とその持続性を説明している。

4) 観光客に土産物売るモンの女性による行商の成功の理由について、観光ガイドや情報提供、あるいは記念品の贈呈といった観光客とのやりとりが、贈与の互酬性を前提とした行動様式に基づいているという指摘は、モンの親族をめぐる議論を近年の観光業に関する理解に結びつけた点で斬新かつ説得力があり、観光人類学の新たな可能性を感じる。

ただし、本論文には若干の課題も残されている。まず、キリスト教への改宗、観光化の進展による女性の位置づけの変化、学校教育など、モンが継承してきた常世と現世の二元的世界観を変容させうる要素にも言及されているが、伝統的世界観の揺らぎに関する議論が十分になされていないことである。また、東南アジア山地民の宗教研究に存在論の視点を導入した試みは挑戦的であるが、理論的にはいっそうの精緻化が望まれる。さらに、図表の描き方の工夫、写真の追加、記述のわかりやすさにも改善の余地がある。しかしながら、これらの点は、本論文の学術的意義と民族誌的価値を損なうものではなく、今後の成果刊

行や研究をより深く掘り下げ広く発展させていく際に追求すべき課題と言える。

以上のように、ベトナムのモンの世界観を新たな研究視点から描出した本論文はすぐれた学術的意義を有しており、申請者には、ベトナムにおけるモン研究のパイオニアとして、東南アジアの山地における民族社会研究を今後牽引していく将来性が期待できる。以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士の学位を授与するに値すると全員一致で判断した。